

試験研究成果普及情報

部門	病害虫	対象	普及
課題名：ラッカセイにおけるヒョウタンゾウムシ類の防除対策			
[要約] ヒョウタンゾウムシ類成虫がラッカセイほ場に侵入する場合、プロチオホス粉粒剤を株元散布する。前年に被害が発生したほ場では、ラッカセイの播種を遅らせて6月上旬まではほ場を空けておくことにより、ほ場内で越冬した幼虫を防除できる。			
フリーワード ^① ラッカセイ ヒョウタンゾウムシ類 薬剤防除 耕種的防除			
実施機関名 主 査 農業総合研究センター生産環境部応用昆虫研究室 協力機関 農業改良課技術指導室、千葉農林振興センター、君津農林振興センター、印旛農林振興センター、千葉大学園芸学部			
実施期間 2004年度～2006年度			

[目的及び背景]

千葉県では、トビイロヒョウタンゾウムシ及びサビヒョウタンゾウムシによる被害が古くから発生していた。近年、東葛飾、印旛、千葉、君津地域などで本種による被害が顕著になっている。本種は多くの野菜及び畑作物を加害するが、特にニンジン、ゴボウ、ネギ、ラッカセイなどが好適作物である。

本種の生態は十分に解明されておらず、登録農薬はきわめて少ない。このため、現地調査、薬剤防除試験などから有効な防除対策を確立する。

[成果内容]

- 1 越冬成虫は4月中下旬から活動を開始し、産卵は4月から7月まで続く（図1）。
- 2 ラッカセイほ場に成虫が侵入する場合、プロチオホス粉粒剤を株元散布することにより、次世代の幼虫数を減少させることができる（図2）。
- 3 被害が発生したほ場で秋まで作物が作付けられていた場合には、土中で成虫及び幼虫が越冬している可能性が大きい（図3）。
- 4 ほ場で幼虫が越冬している場合、ラッカセイの播種を遅らせて6月上旬まではほ場を空けておく。これにより、越冬幼虫は餓死すると考えられる（図4）。

[留意事項]

- 1 プロチオホス粉粒剤（トクチオン細粒剤F）は2005年9月にラッカセイのヒョウタンゾウムシ類に適用拡大された。使用回数は収穫60日前まで2回で、処理量は9 kg/10aである。なお、本剤はゴボウのヒョウタンゾウムシ類にも登録されている。
- 2 成虫がラッカセイの葉を食害すると、左右対称の食害痕が残る。この食害痕からほ場に成虫が侵入していることを推察できる。
- 3 6月まではほ場を空けておく場合、餌となる根を幼虫に与えないように、ロータリー耕耘などで除草する。また、前年の作物の根などを残さないようにほ場管理を行う。

[普及対象地域]

県下全域

[行政上の措置]

農作物病虫害雑草防除指針に掲載

[普及状況]

[成果の概要]

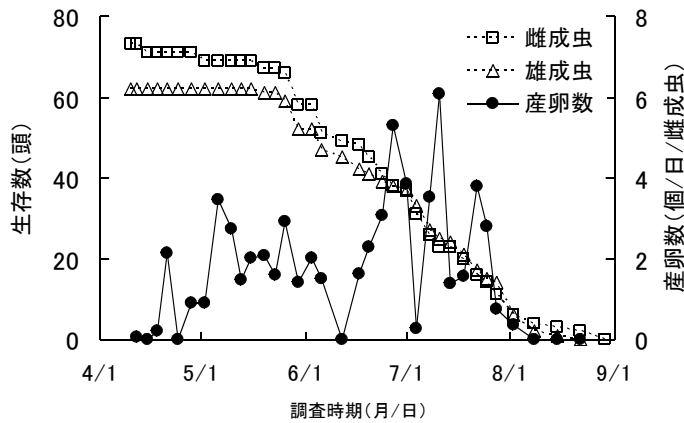


図1 トビロヒョウタンゾウムシ(2004年4月10日採取)の生存数と産卵数

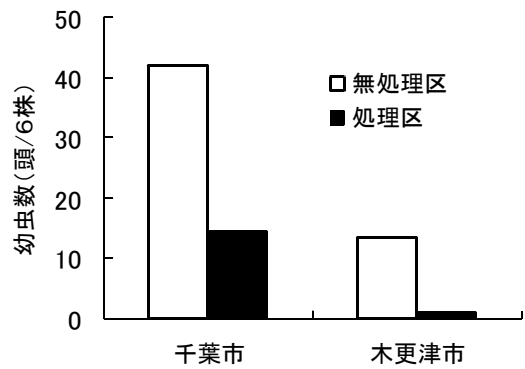


図2 プロチオホス粉粒剤の株元処理とヒョウタンゾウムシ類の幼虫数

2004年6月14日散布、31日後調査(千葉市)
2004年6月15日散布、36日後調査(木更津市)

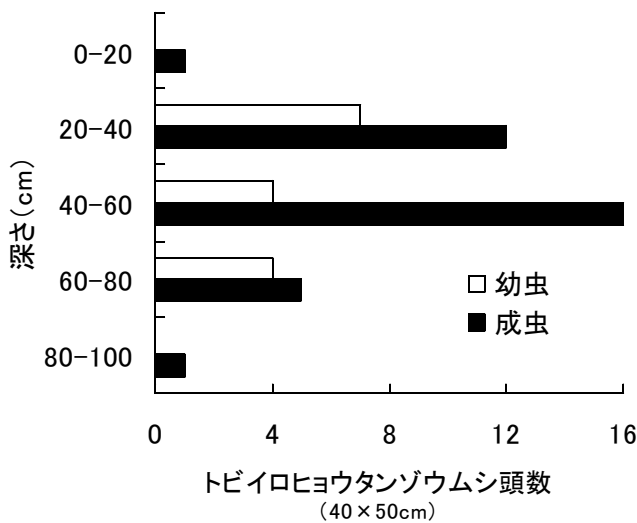


図3 トビロヒョウタンゾウムシの越冬状況(2004年12月22日、木更津市、秋まで栽培されたゴボウで被害発生)

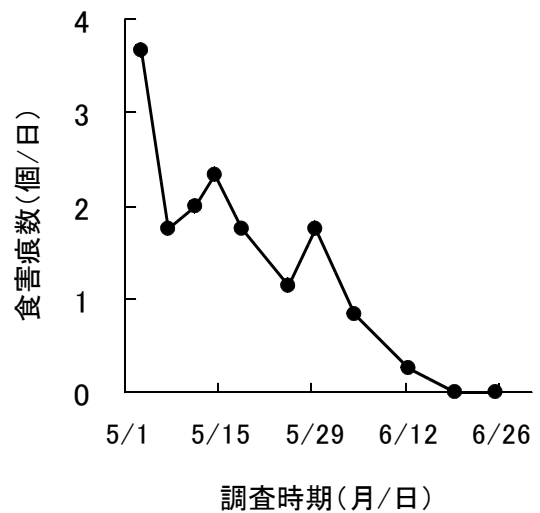


図4 幼虫が越冬しているほ場に埋め込んだニンジン根の食害痕数の経時変化(作付けせずロータリー耕耘により除草)

[発表及び関連文献]

ヒョウタンゾウムシ類の飼育条件下における季節的な産卵消長、関東東山病虫害研究会報、第52集、2005年

千葉県のパラダイス内におけるヒョウタンゾウムシ類の越冬状況と越冬後の生息状況、関東東山病虫害研究会報、第53集、2006年

[その他]

平成16年度試験研究要望課題(提起機関:千葉農林振興センター、君津農林振興センター)